

三河 アララギ

2019年9月 長月 ながつき

九 月 号

第 六 十 六 卷 第 九 号



ニューヨーク日記(155) <http://blueshoe.copetin.com/>

BlueCat, Shoe Lady

CAFE KIF KIF MARRAKECH

Blue Shoe Diaries



モロッコのお昼ですよ！今日は典型的なモロッカン料理いろいろです。チキンのタジン、ハリラスープ、モロッカンサラダとパン。それからミントティー。それぞれスパイスの効いた味で美味しかった。屋上からクトゥビアの塔を眺めながらのランチタイムはなかなかよかったな～

Moroccan lunch time! We're having the most typical food in Morocco. A chicken tagine with prunes, harira lentil soup, moroccan salads with bread, and of course some mint tea. All very tasty in a nice rooftop overlooking the Koutoubia Mosque.

目次

第六十六卷第九号(通巻七八九号)

表紙・インド菩提樹	今泉 由利 (1)	山崎 俊子 (24)	浜田 紀政 (33)
ニューヨーク日記(155)	Blue Shoe (2)	三田美奈子 (25)	重野 善恵 (34)
アカンサスの経	御津 磯夫 (4)	水野 絹子 (25)	今泉 由利 (34)
ははきくさII	大須賀寿恵 (5)	牧原 規恵 (25)	今泉 如雲 (34)
歌集「續草々」	今泉 米子 (6)	稲吉 友江 (25)	植村 公女 (35)
月光	岡本八千代 (8)	鈴木美耶子 (25)	杉浦 弘 (35)
御津山	弓谷 久子 (10)	現代学生百人一首	かさね吟行会
文金高島田	今泉 由利 (12)	東洋大学	『酔いの徒然』(89)
アボカド	安藤 和代 (14)	向井虎太郎 (26)	楽しい時間(82)
拍手	清澤 範子 (15)	松葉瀬亜紀 (26)	絹の話(106)
揺れる心	伊藤 忠男 (16)	堺 菜央 (26)	本田カイロプラクティック先生の春夏秋冬
東京アートブックフェア	矢崎 直人 (17)	林 百絵花 (26)	
茅の輪	森岡 陽子 (18)	森 楓月 (27)	「江上浩二の独り言」
さくらんぼ狩り	白井 信昭 (19)	塚田 悠太 (27)	漢詩研修(三十五)
ボロニーヤの斜塔	杉浦恵美子 (20)	田中 日菜 (27)	奥の細道 奥州へ其三
花花草草	山口千恵子 (21)	森岡 陽子 (28)	こだわり
太陽系	阿部 淑子 (22)	贈呈誌	萬葉集歌の鑑賞
電車を待つホームにて	夏目 勝弘 (23)	童謡 かわいいニャンコ踊り	オヤツ
『いとよせ』	いーはとぶ	『俳句』	「氷魚」のことから(224)
	吉見 幸子 (24)		編集室だより(二〇一九年七月)
	牧原 正枝 (24)		今泉 由利 (58)
	石田 文子 (24)		野菜・まんだら(19)
	森 厚子 (24)		「三河アララギ」について
			(60)

アカンサスの徑

御 津 磯 夫

すずむしは庭に放てよ御馬より携へ来しを知る知らずとも

志賀寺の萩も田原の山羊齒もはやく黄葉す纏れあひつつ

つぎて降る雨のこやみに朝歩む庭の本草に身を細くして

土偶をこぼち埋葬なして杳^{はる}かなるいのち再生の呪術^{まじまじ}としたり

赤潮と呼びて緑の波寄れり自浄作用もつひに及ばず

白き菊ただひととをよしとするわが家のものの白き一もと

点数にならざるものを楽しみてけふぞ栄えある我れの菊の日

たまゆらの匂ひといへど切りて挿す柏葉陀兜囉^{かしはばだちゅうら}の白妙の花

代償をねがひもとむる生きをせずおのれのままにふるまへるはて

来るものは誰れと別かたず去るものを追ふこともなし己まもりて

ははぎくさⅡ

大須賀寿恵

栄転を祝ふ便を書き終はる一と月も延び延びとなりゐし今宵

隣家の紅の牡丹吾が見つつ懷^{かい}炉にベンデン入れ終りたり

連休には体いたはらむ薬飲みて又床に入るスモン病の吾は

転勤希望破棄となりたる処女子に今日も云ひ得ず退庁をする

未就学報告による精薄児のIQ調べつつ指導欄書く

ヘルペスに筋委縮症にスモン病吾等病みつつ歌詠みつつく

連休の一日を寝ねて夜半に起き髪を洗はむ湯を沸かし初む

事務所より転出されし先生がわれにもくださる伊良湖のわかめ

御津川に投げ捨てられし芥の中に紅太く馬鈴薯芽吹く

表装のできたる阿礼の埼の拓本が今朝の出がけに届けられ来ぬ

歌集 「續草々」

今 泉 米 子

ゆくりなく詣でし宇治の黄檗山ここに香椿ちゃんちんの一木を知りぬ

村人ら守り継ぎきて黄の白の菊供へありこれぞ姫塚

照り厚く定家葛は塚なして姫の姫塚の祠を包む

丹野城滅亡のとき自刃せし姫を伝記に伝へ残りぬ

刈株田の一隅区切りて濃緑の定家葛の下の姫塚

昨日見し小さき姫塚おもひをりいま降りいでし秋ふかむ雨

しかたなく過ぎてゆきたる幾年か土に沈みゆく庭の飛び石

杉も檜も伐らせしあとに植ゑ並べ育ちゆく見む沙羅も二もと

やしほもみぢらしき紅葉を拾ふかな参道長し山科御陵

千年に角かどなき青き鋪石の参道にいくたび佇ちとまりつつ

はゞきくさⅡ

河原静誠

寒行に開經の偈を声高く誦し行くわれに犬の吠えたつ

節分の祈禱を了へし衣にて豆まく吾れを子等のかこめる

只独り生ひたちたりと思ふわれ父母恩重經をくりかえし讀む

佛門に入りしよろこび語りつつ年忌の非時に刺身をわが食ふ

本守の次郎柿一つわが採りて父の忌の今朝遺影に供ふ

独居のわが本箱に今日買ひし捨子物語り一部を加ふ

元旦の静かな陽ざし背にうけて年回表を独り記せる

一塊の路傍の石の光れるを吾がてのひらに拾ひあげたり

寒行を吾が怠りて日だまりに盲しひし伯母と一日語らふ

今日もなほ癒らぬ風邪に声からし寒行の經を誦しに出でゆく

月つき光かげ

蒲郡 岡本八千代

仰ぎたる夕暮れの空に上弦の月光白しもの思はする

自おのづから独り暮らしに馴れつつも君への偲び離れざりけり

遠き空の白き半月眺めつつ今日の一日ひとの窓を閉めつつ

何かしら思ひ出ばかりが浮かびくる蚊取線香のうすけぶる部屋

今日の悩み「明日あしたは明日の風が吹く」思ひてしばし眼まなこをつむる

一本ひとつもとの細き茎にもわが陀兜ダチユウ囉今か咲かむに十とあまりの蕾

文明先生磯夫先生のが陀兜囉と思ひつづけて噫あゐ今年の陀兜囉よ

父の子はわれ一人なり令和元年七月二十三日は五十回忌とか

父逝きて嗚呼五十回忌一人われは線香燵らせ「正信偈」唱へり

ひとり娘のわれを嫁がせてくれたりき父よ六十余年前のこと

淡々と令和の日日の過ぎゆくごと夜半となるまで読書続けて

今宵読む本は相対性理論の本先ずは広辞苑より抜き書きをして

ま夜中に台風六号は去りゆきて今朝は東の海よりの光り

何事のなかりし如くこの光はやも稲生の海より届く

小学生になりし曾孫この光に飛びたち喜ぶアピタへの約束

御津山

豊川 弓谷 久子

姉の住みし家に我も住みたしと我が夢遂に現実となる

姉逝きて四年たちたり久びさに訪れ見れば荒れ果てゐたり

病む姉を看とりに通ひし年月よ住む人の無き家となりをり

姉の家に越さむと決めしその日より忙しくなりたり我が身辺も

住み馴れしこの家のくらしもあと暫し四十余年住み馴れし家

何も出来ぬもどかしさありあきらめとのはざまの中に一日は早し

御津川のせせらぎ開きて御津山を仰ぎて暮すもあと幾日か

のうぜんの花散り敷けり赤々と雨の小道をいろどりながら

はやばやと剪定したり紫陽花の花数少なき今年の花を

国府祭りの花火の音が響き出す暫し眺めむ玄関に佇つ

御津山の片への空に色とりどりの打ち上げ花火の今早打ちか

馴染み深き国府の祭りの思い出が浮かびて消ゆる花火と共に

繁りたる庭木の中より声高く油蝉啼けり朝のひととき

今年また浴衣の着付け頼まれて子に手伝はせつつ帯結びをり

台風もこと無く過ぎたり猛暑なり遅き梅雨明けテレビは告げる

文金高島田

東京 今泉 由利

躍動すニユートリノの映像よ見えないものをみてゐる不可思議

超新星爆発とふ映像はスマートフォンに時々眺む

尺取虫からだにコンパス持ちをらむコーヒー若葉にまんまる虫喰ひ

海水と淡水と合ひ会うところ汽水の池にアオサギ動かず

クスの木の根方に数多泥んこの小さき抜け殻ニイニイゼミよ

父母に会ひにゆきにし速度にて新幹線のこだま号走る

父と母と姉と姉ともふ会えない認識^{あら}新たもふ出合へない

鞠子姉様文金高島田の御姿でした小学生の私送りき

兄弟姉妹一番上の女医なりき頼もしかりき優しくありき

思ひ出も悲しみも慈しみも短歌のリズムと共によみがふ

地球なる二万キロの旅にして地球半分のまろみに添ひき

釈尊の左の腿に右の足右の腿には左足これ結跏趺坐と

自らの両足をもて出来ざるを知りて彫りをり釈尊坐相

釈尊の召さるる袈裟を薄絹もて左肩背中右肩胸へ全身ぐるり

インドなるサリーと同じように着る知りてほのぼののぼのとして

アボカド

豊川 安藤 和代

弓張りの山脈くつきり朝の窓清し空氣が全身ながるる
草刈機田植え準備の音高く蛙もせわしつばめもせわし
洗濯機レンジ湯わかしチンチンと吾呼びくるる朝のひとつき
根は深く臭いも強き十葉の嫌らわれおれど花の白さよ
花苗に一センチ程の蠅螂のあげたるかまが命ひからす
久に友と電話をすれば不思議なり足腰の痛み消えてさわやか
肥えづきし稲田に何ぞ黒色のおたまじゃくしの命が動く
この年もあの場所からの牛蛙声聞く夕べひとりしみじみ
アボカドを遊び心に植えおけば芽が出てしかと空へ五センチ
朝の窓カサブランカの香のながれ老いの心を柔らかにする
葉にかくれ静か枇杷の実昨日今日濃く輝きて梅雨明け近し
初ボーナスの孫に招かれ食事会雨あめアメも気にはならざり

拍手

春日井 清澤 範子

八王子神社に詣で拍手を打てば凜とす静寂の中

引きて来てシルバーカーを横に置き団栗転がる拝殿に進む

病院の四科にかかる吾が夫は菜園出来ず淋しくおりぬ

泣く程に吾の心の弱まりて夫の励まし言葉やさしも

雨の日はシルバーカー引けずただ家の廊下より椿の繁り見てをり

今日もまた水枯れる程暑くして熱中症注意テレビの報道

シルバーカー押して二千歩は歩きたしまだまだ梅雨明けとならぬ七月

介護保険受くるも聞きとり調査員は茶をことわりて日常を聞きぬ

娘が吾に買ひてくれたるシルバーカー玄関に置きて梅雨明けを待つ

朝食の味噌汁作るには未だ早し一時床にて思ひ巡らす

シルバーカー公園抜けて歩く道ゆっくり速度に1868歩

シルバーカー押して公園は芝刈りの終りてをりぬ蝶一羽舞ふ

揺れる心

大阪 伊藤 忠 男

パワハラにセクハラ差別人の道我に有り無し問ひしこの頃
腰痛し体幹弱く視野狭し日ごと体力衰える歳

あれこれと迷い迷いて喜寿間近未だ決まらぬ我の行く道

免許証返納勇氣まだつかず不便がかりこの歳にして

出合いあり思いも寄らず博学の先輩我に道教えたる

先駆けて世界に羽ばたく人材を育て名を成す学問の府

悪法も法は法なり正義とて法の下だと教えられしや

自らの主張のために何あるもあるが政治か誰託せしか

我が心相いのままに託す夢叶うを信じまた歌を詠む

歌詠めば悲しみ祝い友に恋全て溶かして清らかなりや

東京アートブックフェア 東京 矢崎直人

Zineといふ本の形態粹越えてワタシの声を探す我々

色 写真 イラスト 凝った本たちに売ってる人も負けず劣らず

国境を越えて届いた本たちの若者たちの生きる肉体

より強くより美しくfreedom個の追及の世界を変へり

日本の技術の粹と政治力形を成せば江戸城再建

梅雨寒しいつから夏の遠きこと日照不足かつてタイ米

差す人も差さない人も小糠雨手に持つ傘をひらかず眺め

河童忌に「芋粥」読んで思ふ事書きたき事を書き抜き死んだか

大和田の花火大会小さくも真上に揚がる花火見上げる

早く梅雨明けて夏の日来ないかな開いた口の猛暑に閉じる

茅の輪

東京 森岡陽子

路地裏に紫陽花あふる咲き満ちる少し邪魔でも楽しく通る

見上ぐるや夏越の茅の輪石鳥居真中にぶら下ぐ六日午後二時

尺同じ親子の鴉屋根伝い一羽はカアカア一羽はギャアギャア

御霊会に鬼灯の果実落ちぬようそつと持ち行き墓に手向ける

迎へ火も送り火焚くは雨の夕御霊偲ぶや両親と愛犬

こん年も桜桃の届く時山形の古刹住職に謝意を

庭園の周り点々大使館言葉スパイスナショナルマーケット

蟻の跡追って引きぬく夏の草一雨一晴腰痛と溜息

早々と予約し店に集まるも今年は梅雨寒暑気払いとならず

さくらんぼ狩り

豊川 白井信昭

バスツアーさくらんぼ狩り妻とゆく巻層雲の朝の青空

見晴るかす富士の高嶺に雪残る山の稜線くつきり現はる

雄大な夏の富士山にわかにも七合目辺り雲白くかかる

清らかな池の水深くすき透る日差しの中に輝き見ゆる

富士山麓走りゆくR139みどりの中を朝霧高原

さくらんぼの生りいる姿妻と我一度見たしとバスは山梨

ひたすらに新東名を帰る道日長一日の大きな落日

瑞瑞と芽吹き来たりし門口のジャスミンの花ほつほつ白し

さ庭辺に妻の植えにき茄子苗のみな堂堂と勢いており

笹百合の花咲きをらむさがらの森香りに惹かれ来たる我はも

ボローニヤの斜塔

蒲郡 杉浦恵美子

我が庭にデュランタ咲きぬ紫の小房を何時しか八年待ちぬ

我が窓の雨音烈しき同刻に柏崎花火のテレビ中継

梅雨明けの遅き今年の我が庭の花梨の若木を雑草覆ふ

雑草はこまめに摘めと夫言ひきこんな有様定めし苦虫

さは言へど草取り出来ぬ言ひ訳は山ほどあるとこつそり呟く

我が宿は三ヶ根山の麓にて日がな一日時鳥鳴く

我が宿の表の喧噪よそにして暫し聴き入る山時鳥

五百段上れる脚力今はない見上げるばかりボローニヤの斜塔

夫居らば再びチャレンジしたろうか倒れてきそうなボローニヤの斜塔

我が夫と上りし斜塔を月と共に飽かず仰げるボローニヤの街

花花草

豊川 山口千恵子

庭の甕に今年はミニ蓮つぼみもつしげれる丸葉よりぬき出て高し
先端の赤きつぼみは小さくてみまもりゆかむ花咲くを待つ

細きくき長くのびたるその先に花花草はピンクの花を

午後になり小さきピンクの花咲かせ花花草は夏の日に咲く

今年またいつもの処にオシロイ花ころろ黒実あたりにこぼし

かるがるとブロック塀にとびうつりわれをふり返るこののら猫は

なみなみと水たたへし音羽川椎ノ木橋より鯉も見えず

やうやくに半分に切りしカボチャなり半切娘に持たせて楽し

切り分けしカボチャほくほくおいしかり夕餉の食卓いろどりにけり

庭隅にしげる半夏生白々と目立ちて見ゆる梅雨の晴れ間に

いつよりか燕きたらずわが家に電線に囀る声を聞く

田の畦より大きく羽をひろげつつ白鷺まひゆく白美しき

太陽系

横浜 阿部 淑子

なぜかしら一輪落ちし紫陽花水器に浮かべ命見守る

長梅雨に意外な低温弊害とやっぱり夏は暑くありたし

遺伝子の研究すすみ人間の運命変える驚きの未来

スマホ手に瞬時に解かる事多く情緒判断欠くこと多し

花火師の命をかけた大花火隅田の夜空に五輪拡がる

はやぶさ2再着陸でのお手柄は太陽系の歴史に迫る

電車を待つホームにて 豊川 夏目勝弘

入電を待つホームにて立ちてをり湿布薬を匂はせ女すぎゆく
湿布薬を匂はす女は肩ならむ腰ならむと思ひに遊ぶ

終点の電車を降りくる人々のゆるりゆるりと歩むは古い人
過ぎてゆく人の足元みつめをり靴のかかとの摩耗それぞれ

手を取り合ひゆるりゆるりと行く老夫婦我には今後もなき姿なり
コーヒーにて時間をつぶすもホームにて電車を待つも同じ時間ぞ
手荷物は二つと決めてゐしなるも今日は三つあるを忘れし

週に二度街に出でて見知らぬ人を観察するも老化の防止

外国の人が駅員に尋ねゐるところを見るが少なくなりぬ

キヨスクにて缶酒を買ひ飲むことも我の一つの楽しみならむ
同じ時間に同じ電車に乗る人が必ず一人居るが嬉しかりけむ
同じ電車の同じ車両に乗りくる人の過現未をばめぐらす遊び

『いっしょに』

西浦公民館 いーはとぶ

ときは令和江戸城跡に孫とゐる桜田門の石段踏みつつ
池坊全国大会に参加せむとみなとみらいの駅に降りたつ

吉見 幸子

みんなして机に向かふこの時間つつましくあるか施設に母は
この夏の初挑戦はすいか作り雌花ほろほろ網かけの時期ぞ

牧原 正枝

「いただきます」三歳曾孫の音頭あり食事始まる我が家の夕べ
夕方の時報に合はせて老犬の声張り上げぬ花冷えの中

石田 文子

わたしには初めてつくしのけふの旅祇園「豆寅」の食事もたのし
十六夜の月見る琵琶湖「花街道」月はさざなみの湖面にゆれて

森 厚子

庭先の鉢に近づくたびごとに水音ぽちゃりいつかのカエルか
チャラボコの太鼓のバチは打ちつつぎはしやぎし子らの声遠のく

山崎 俊子

あぢさゐの白き毬花ふうはりと夕やみの庭に浮かぶごと咲けり
君の庭の柿の青葉に無量光ふりそそぎゐてけふの静寂

三田美奈子

携帯に残せし病の父の写真数多取り出せぬままの十年
傷を負ひ我が家に来たる幼鳩おさなばとの十日余りの命儚し

水野絹子

われありて畑仕事の日々ありぬ年に一度の実り待ちつつ
われと娘ブルーブリッジ歩きたり海辺の舟の明かり見えつつ

牧原規恵

五年前可睡そのの園に購ひし紅百合咲けり子等のくる朝
寝つくまで団扇に扇ぎてくれし祖母今は懐かし遠き日の夏

稲吉友江

久に会ひしかつての隣のご主人は元氣であるかと声かけくださり
ほの二花ふた小さく咲きたる梔子ウチナシよ君にもらひし再びの花

鈴木美耶子

現代学生百人一首

東洋大学

《小学生の部》

だんじりだ今年も汗がにじみだす声をからしてオーリヤソーリヤ

堺市立深井西小学校六年（大阪府）

向井虎太郎
むかい こ た ろ う

友人に毛布をとられかぜひきだそれがだいごみ学年キャンプ

大村市立三城小学校六年（長崎県）

松葉瀬亜紀
まつ ば せ あ き

熊本へお城を見に行きおどろいたドミノみたいに崩れてる

大村市立放虎原小学校六年（長崎県）

堺菜央
さかい な お

運動会組み体操の逆立ち練習世界がさかさまコウモリみたい

大村市立放虎原小学校六年（長崎県）

林百絵花
はやし も え か

お母さん私の名前呼びすぎて声がかれるよ大丈夫かな

大村市立放虎原小学校六年（長崎県）

森^{もり}

楓^{かえ}月^で

夏休み魚つりし遊んでたへんな魚がつれてうれしい

大村市立放虎原小学校六年（長崎県）

吉^{よし}

川^{かわ}

和^{かず}希^き

《秀逸作品》

残業の光に向ける指鉄砲撃つは未来の自分の姿か

東北大学大学院一年（宮城県）

塚田悠太

決まったよ喜ぶ私と温度差が寂しさ増す母のほほえみ

山形県立酒田光陵高等学校三年（山形県）

田中日菜

贈呈誌

森岡陽子

秋楡 第104号

○町並みの変わりゆきたり歴史消し伝えうする船町港

不破明子

○見慣れたる景色のむかし説かれおり日傘の影にお土居と堀と

木村郁子

○川面まで柳の新芽は垂れながら身をまかせおり風の強きに

杉谷良子

鹿児島アララギ 7月号

○満月に寄り添ふ星は木星なりや思ひつつ仰ぐ六月の空

重盛ヒサ子

○田植ゑすみ水張りし田のくつきりと山を写して日は傾きぬ

森枝むつ美

○吾が庭に生れて幾日のカマキリか振り向く様も堂に入りたり

堀之口ふさえ

○緑濃き空気を一杯吸ひこみて総身酸素に包まるる思ひ

千葉源治

○幌張りし作業小屋並ぶたばこ畑に白南風^{はえ}吹きぬ球磨^{くま}の大空

泊 興 子

冬雷 8月号

○春雨に濡れて帰れば玄関の鉄の扉に蚊とんぼ宿る

赤 羽 佳 年

○人気なき岩場に坐る目前の川面に跳ねる小さな光

嶋 田 正 之

○早朝の大海原を次々と舟が出てゆくしぶきたてつつ

池 亀 節 子

○半世紀過ぎたる今も示し在る亀有駅前小さき書房

田 中 祐 子

○池みづを覆ふことくにひろごれる蓮葉のみどり風に騒めし

桜井美保子

○紫陽花に背中押さるる心地あり雑踏のなか改札抜ける

中島千加子

○いつもより早めに西へ行く鳥二羽が揃ひて夕日に赤し

吉村昌子

かわいいニャンコ踊り

高橋育郎 作詞

ニャンニャン ネコちゃん踊りだす

右手をあげれば 招き猫

しあわせ呼んでる うれしいな

シャンシャン元気に ソレ踊れ

ニャンニャン ニヤニャンと踊ろうよ

ニャンニャン ネコちゃん踊ってる

背伸びをすれば 見えるよね

明るい未来だ たのもしい

ルンルンそろって 踊ろうよ

ニヤンニヤン ニヤニヤンと踊ろうよ

ニヤンニヤン ネコちゃんかわいいな

ごろんところがり 眠り猫

いい夢みている たのしそう

スヤスヤあしたも よろしくね

ニヤンニヤン ニヤニヤンと踊りましょう

『俳句』

石段を登る園児の夏帽子

山迫京子

緑道に凌霄かづら際立ちて

今年また同じところに半夏生

沖とおく灯す泊船夏の月

山元正規

影やはき墨田暮色の花火舟

夕焼の野原に残る草の罨

高僧の読経の響く夏衣

森岡陽子

夏草や犬とよく来し散歩道

入日影遠く聞こゆる蟬の声

蝸牛銀の小径をかへりみず

松本周二

露草の小径を白きスニーカー

流れつつ首を突立て蛇およぐ

滴りを集めて光る五輪塔

田中清秀

梅雨曇り結界守る天狗像

文庫本閉ぢる夕暮れ半夏雨

葉雫に行先変へる蝸牛

浜田紀政

梅雨明やひと手間かける日焼止め

木芙蓉目当に來いと教えけり

行く雲に名前をつけて夕涼み

重野善恵

打水や料亭奥の三筋の音

花笠の花に似たるや立葵

尺蠖の木の葉に残す円き穴

今泉由利

牛蛙一声太い木下闇

超新星爆発かとも遠花火

夏潮の羽後出羽羽前走り抜け

今泉如雲

山裾は日本海へ夏の山

白南風や羽州の奥に津軽あり

野心などなしひとり居のところてん

植村公女

鼓笛隊整然と待つ余花の駅

多言語の上野アメ横梅雨曇り

枯れ色の梅雨の奈良井の酒林

杉浦弘

杉の秀に佇つ尼鷺や梅雨深き

灯を消せば夜干の梅の匂ひかな

懐の涼風放つ大櫓

眠れねば闇に額の蛾を打てり

かさね吟行会

「有栖川記念公園」 七月

田中清秀

梅雨寒や山の匂ひの濁り池

秋櫻子忌梅雨の鴉は低く鳴き

岩石に一つ葉ひとつ直ぐと立ち

周二

正規

由利

和宮親子（ちかこ）内親王は仁孝天皇の第八皇女、

孝明天皇（明治天皇の父）の異母妹であり明治天皇の叔母に当たる。降嫁して江戸幕府第十四将军家茂の正室となる。徳川家に嫁ぐ経緯は複雑だが、権力失墜に伴い公武合体を画策する幕府の意向で降嫁された。しかし、内親王にはその時婚約者がいたことは広く知られている。そのお相手が後に官軍の総大将として江戸城に入城する有栖川宮熾仁（たるひと）親王である。明治政府樹立後は明治天皇を支え最高職位の総裁に就任している。今回のかさね吟行会は港区麻布にあるその有栖川宮家ゆかりの有栖川記念公園を散策した。

令和元年七月十二日、梅雨真っ只中の小雨が煙る一日となった。東京メトロ日比谷線広尾駅から徒歩三分、麻布台地の変化に富んだ地形を生かした緑深い公園である。園内には池や溪谷が造られ、土の道と丸太を使った階段、溪流には石造りの橋が架けられるなど、趣のある風景が造り出されている。

江戸時代この地には、盛岡南部藩の下屋敷があったが、明治二十九年有栖川宮の御用地となり、その後高松宮家に引き継がれ、昭和に入り東京都に賜与され記念公園として一般公開されている。また、周辺にはドイツ、フランス、オーストリア、イランなど二十数カ国の大使館が集まりインターナショナルな土地柄でもあり、都内随一の外国人が多い公園とも言われている。平日の午後、天気が良ければベビーカーの外国人の親子連れや英語やフランス語でサッカーに興じる子供達が見うけられる。ベンチに腰掛けていると葉擦れの音や鳥のさえずりが聞こえ、ここが都心の真ん中であることを忘れさせる。また、併設されている都立中央図書館は、東京大空襲で甚大な被害を受け仮設館舎だった都立日比谷図書館に収集されていた古書や歴史的資料をここに移し、昭和四十八年に開館した。蔵書数は国内最大級の約二百六万冊、その内新しい図書を中心に約三十六万冊を常に開架しているという。因みに、都立の図書館は現在、国分寺にある多摩図書館とこの二館のみである。

図書館の匂ひ懐かし梅雨湿り

素山

額の花園をとりまく大使館

高層のマンションのぼる夏の霧

陽子
紀政

「♪宮さん、宮さんお馬の前にヒラヒラするのは何じやいなトコトンヤレ、トンヤレナ・・・」これは西郷隆盛らの官軍が錦の御旗を掲げて有栖川宮を東征大総督として江戸城へと進軍する時の軍歌である。ここの公園の中央広場に近代彫刻の先駆者である大熊氏廣制作になる立派な騎馬像が建てられている。新緑に囲まれ前足を力強く踏み出し、手綱をしっかりと握り正面を見据えている有栖川宮の銅像は、凛々しくもあり新しい日本を築く心意気を感じさせる。

嘶（いば）え立つごとき騎馬像夏の雨
梅雨深し時代と生きし宮のこと
清秀
礼子

春から夏にかけ雨の日が続く鬱陶しい日本の梅雨、今年はことさらに長いようだ。梅の実が熟する時期から「梅雨」「カビの発生しやすい頃から」「霰雨」とも書く、また、傍題には梅雨じめり、梅霖、梅雨時など多くの表現がある。芭蕉の「降る音や耳も酸うなる梅の雨」、秋櫻子の「青梅雨の金色世界来て拝む」、蛇笏の「簾外のぬれ青梅や梅雨明り」など先人の巧みな梅雨の句にはあらためて感心する。

鯉、カエル、亀、小雀や梅雨の沼
かなぶんや背に泥付けて雨の中
しのぶ
さち子

昼食は都立中央図書館の五階にあるカフェテリアで思い思いのランチを注文する、ただ、雨天の為か近隣の子連れママさん達が大勢集まり大賑わい、句作はここでは進まず、一階の図書室に戻り閲覧席に陣取る。明治維新の激動期と現在の国際化の混在する有栖川記念公園は、ゆっくり歩くと新たな発見がもつと有ったかもと、散策を思い出しながら集中する。

句会場は広尾に適当な場所が無く、恵比寿駅前のカラオケ店に移って行った。いつものとおり囑目三句出し四句選で行われ梅雨時の吟行会は無事に解散となった。

■かさね吟行会■

日時 二〇一九年九月十三日（金）

場所 新宿御苑

集合 正面入口、インフォメーションセンター
十一時

申込 森岡陽子宛 (03) 3712・2835

『酔いの徒然』（八九）

丸山 酔宵子

『クリムトの前の寿司握り』

バブル全盛、今から25年ほど前。目黒区碑文谷の閑静な住宅地のご真ん中、瀟洒な豪邸を懷石料亭風に改造した寿司処「六亭（りくてい）」があった。石段を登り玄関に続く石畳を踏んで暖簾をくぐれば、爽やかな香が焚かれていた。さらに奥に進んでいくと目の前に手入れの行き届いた大きな青々とした庭が広がっている。その庭を背にしたガラス越しに白木の一枚板の寿司カウンターが設えてある。場所柄一見（いちげん）客はなく、昔からの常連客の予約のみであるが、板前大将恩地さんの「握り」目当てで来るわけで、昔からの大将の常連客で連日満員。

元々大将は「六亭」の前、自由が丘近くの奥澤で「勘助」という寿司屋で雇われ大将をしていたが、大将の評

判が高く、土地柄、芸能人やスポーツ選手も多く、在りし日の妖艶な女優淡路恵子もたびたび見かけた。その当時はまだ喫煙はうるさくなく、淡路恵子のしなやかな指に挟んで、艶っぽく美味しそうに煙草を喫う姿を横で眺めていた。

大将は浪花生まれのトラキチで、見かけは大酒飲みの風情であるが、全くの下戸。無口で大柄な体でどてと板前に立つ姿からは、あれほどの秀逸で繊細で見栄えのする「握り」を生み出すとは想像もつかない。

そんな「六亭」も豪邸家主との折り合いが上手くいかなかったのか、リーマンショック後に閉店。自由が丘、八雲近辺を中心に物件を探したのであるが、なかなかいい物件に恵まれず時が過ぎてしまったのである。

とある時、自由が丘で偶然出会い「どうしたの、物件見つかった？」「なかなかいいのが無いんですよ。でも、ケータリング握りはやりますよ」「ホーそれはいいや。それじゃ、大将の良く知ってるおばちゃんや一族郎党みんなに聞いてみるは……。10人位で問題ない？」「十

分ですよ！」

梅雨入りの庭の紫陽花が開き始めた6月の土曜日夕刻。板台から包丁、こだわりの小皿等寿司道具一式とネタとシャリを高級車に積んで、糊の効いた白衣で颯爽と場である。一週間前の事前打ち合わせに従いテーブルと椅子を設営し、我が家のメインテーブルの壁に飾ってある『クリムトの接吻』の前に、握り台を置いて「大将の握り宴」の始まりである。前日と当日も豊洲市場に行つて選りすぐりのネタを仕入れ、下ごしらえをしつかり。お櫃に入れたシャリを横に置いて、いざ「大将握り」のスタートである。

「やっぱり旨いね。大将！シャリの何とも言えないふつくら感が堪らないね。」「あれ、よく新子（シンコ）あつたね。こりゃ旬だ、たまらん！」

太き指握る新子は潮の味

酔宵子

楽しい時間 82

山本紀久雄

2019年7月31日

神にならなかつた鉄舟・・・その十二

聖蹟記念絵画館に掲示されている『江戸開城談判』壁画が、今年3月3日にBS11で放映された『壮麗な美術館で日本の歴史を辿る「聖徳記念絵画館」』の中で取り上げられ、解説に登場した同館副館長が次のように力説された。

「この壁画は緊迫した場面を表現しています。それは刀の置き方でわかります。通常は右側ですが、これは左です。この会談が決裂したらどうなるのか。その時は・・・という海舟の決意を伝えているのです」

つまり、江戸無血開城は慶応4年（1868）4年3月14日の会談で決まったという見解を述べたわけである。この見解は妥当であろうか。そのところを検討してみたい。

まず、最初は西郷と鉄舟の駿府談判である。この連載で何度も触れているが、話の進め方として再度述べたい。

徳川慶喜は、慶応4年（1868）正月2日に勃発した鳥羽伏見の戦いに敗れ、薩長軍は官軍、幕府軍は賊軍となり、慶喜は大坂湾から船で脱出、江戸に1月12日に戻った。江戸城では恭順派と抗戦派に分かれ議論が紛糾したが、慶喜は恭順策を採り、その意を表すべく、上野の寛永寺二室に謹慎・蟄居した。しかし、薩摩・長州を中心とした官軍は、総勢5万人といわれる兵力を結集し、朝敵徳川慶喜の居城・江戸城を攻めるべく、続々と京都から下っていた。

この状況下において、慶喜は恭順の意を正確に官軍に伝え、

かつ、江戸を戦火から防ぐべく、高橋泥舟の推薦で、泥舟の義弟である山岡鉄舟に、単身、江戸から駿府に乗り込み、実質の官軍総司令官であった西郷隆盛と会見・交渉することを命じた。鉄舟は、その慶応4年3月9日の駿府での会見模様を、明治15年三条実美賞勳局総裁の求めに応じ、『西郷氏と応接之記』として自筆で書き残している。

その中で西郷から以下の5箇条が示された。

1. 城を明け渡すこと。
2. 城中の人数を向島へ移すこと。
3. 兵器を渡すこと。
4. 軍艦を渡すこと。
5. 徳川慶喜を備前に預けること

鉄舟は1条から4条は受け入れるが、断じて5条の「徳川慶喜を備前に預けること」に強く反論し、激しい議論攻防があつたが、結果として「西郷に二任してくれ」という結論を引き出し、この時点で江戸開城と、慶喜の生命及び徳川家の継統が実質的に決まった。

さて、鉄舟が持ち帰った西郷から提示された和平案を、勝海舟は上野寛永寺大慈院に蟄居している慶喜に示し、次に大久保一翁、川勝備後守、浅野美作守、向山隼人等と共に対策を講じ、次の奉答嘆願書を作成し慶応4年3月14日の西郷・勝会見時に、勝から提出した。

海舟が書き残した「慶應4年戊辰日記」の3月14日に「西郷に面会す。諸有司之嘆願書を渡す」と書かれている。明らかに海舟は「嘆願書」と自ら述べており、「談判云々」という言葉はどこにもなく、勝から出された嘆願書の第一条文言は以下である。

《慶喜は隠居の上、水戸表へ慎みまかりあるようにしていただきますとございます》（海音寺潮五郎著『敬天愛人 西郷隆盛（四）』学研文庫）。

あくまでも慶喜を水戸へという「お願い」を西郷に申し出たわけである。

海舟から「お願い嘆願書」を受け取った西郷は、「拙者一人では決められない。追って大総督宮のご意見を伺つて沙汰いたしましよ」と述べ、隣室に控えていた村田新八、中村半次郎（桐野利秋）を呼び、翌日に追つていた江戸攻撃を中止すべく取計うよう命じた。

《この攻撃中止の命令は、この時点では、明日に予定されていた総攻撃を一時とりあえず延期するという建前で出されたのだが、ついに永久のものとなり、江戸は焼土となることをまぬがれ、百万の住民は安全であることが出来たのである》（『敬天愛人西郷隆盛（四）』）

西郷は、15日、江戸を発し、総督府に戻り、翌16日に大総督宮に報告、さらに京都に行き、20日に太政官代に出頭、勅裁を仰いだ。種々の意見が提出されたが、結局西郷の斡旋によつて、左図のように嘆願書の大部分が勅使として採用されたのである。

徳川方が嘆願した緩和嘆願		新政府の正式決定	
①慶喜、水戸謹慎	OK		
②城、田安家へ預ける	※尾張藩へ預ける		
③軍艦、必要分残し、残余引き渡し	※いったん全部接収、後に必要分返還		
④武器、必要分残し、残余引き渡し	※いったん全部接収、後に必要分返還		
⑤家臣、城外へ移住	OK		
⑥鳥羽伏見の戦い責任者、処罰緩和	OK		
⑦江戸の治安維持は徳川方で	OK		

勅裁の第一条文言は《第二條 慶喜は去る十二月以来、天朝

を欺き奉り、その上兵力をもつて皇都を犯し、連日錦旗に発砲した。重罪であるので、追討のために、官軍を差し向けられたところ、追々真実に恭順、謹慎の意を表し、謝罪を申し出た。それによつて考えてみると、祖宗以来二百余年、平穩に国を治めて来た功績も少なくはない。また実父である水戸贈大納言（斉昭）の積年の勤王の志業も深いものがあるので、あれこれ考え合せられて、格別に深厚の思召しをもつて、左の条件が実行相立つならば、寛典に処せられ、徳川の家名をお立て下され、慶喜は死罪二等を宥めらるるにより、水戸表へ立ち退き、謹慎して居るべきこと》（海音寺潮五郎著『敬天愛人 西郷隆盛（四）』）

つまり「慶喜から謝罪の申し出があつたから、慶喜の命は助け、水戸にて謹慎することを認める」という勅旨なのである。この結果を受けて、西郷は再び駿府に引き返し、大総督宮に復命し、大総督宮は東海道先鋒総督橋本實梁、同副総督柳原前光を勅使として朝命を徳川氏に伝達することにした。斯くして4月4日に勅使の江戸入城となつたのである。

これが江戸無血開城の全容である。つまり、無血開城の決定は、京都における3月20日の勅裁によつてなされたわけで、3月14日の西郷・勝会見では「正式決定」とは言えず、3月9日の駿府における西郷・鉄舟談判、こゝで示された条件に基づく嘆願書が、3月14日の西郷・勝会見で提出されたという理解が妥当であらう。

以上から、聖蹟記念絵画館の副館長がテレビで力説した「無血開城の談判が3月14日に行われ、その場で決定したのだ」という理解には疑問が残るわけである。

絹の話 (106)

「アトリエテレビ」 今 泉 雅 勝

絹の考古学入門 (その1 日本の絹のルーツ)

絹の考古学へのきっかけ

昨年京都市立大学の漆の研究者から古墳から発掘された棺の一部と思われる物の切片の顕微鏡拡大写真をメールでいただきました。それは漆で絹と砂がひ層に重なった板状の物で、この絹はどの様な種類で、いつの時代の物か判りませんか。という依頼でした。

蚕から吐糸された糸の断面が中央部に「お握り型」に見える所が散見され、周辺に「変形三日月型」の所が混在していて判断に困りました。切片を作るとき周辺が押しつぶされたとも考えられましたが、変形型の方がやや多いので、変形型の特徴がある日本の山野に生息する「天蚕」ではないかと返信しました。後日、東京農大昆虫機能開発研究室の先生にそれぞれの糸の断面積の計測などをして頂いた所、「これは6世紀前半の中国の揚子江中流で採られた家蚕の糸ではないだろうか」という所見がありました。私はこの事に感銘を受け、仕事の合間に絹の考古学を紐解くようになりました。

絹の考古学に必要な基礎知識

官能検査1) 目視: 家蚕、野蚕の判断(絹の艶の差)、

糸捻り、織方、織密度、染色深度、

文様、経年変化

2) 触覚: 家蚕、野蚕の判断(織度差)、織度

偏差(古代→現代織度偏差減少)

科学的検査法3) 光学顕微鏡、走査電子顕微鏡、放射性

炭素測定

各種知識4) 分類形態学、生態学、細胞学、遺伝子学、

育種学、生物地理学、

5) 歴史学、人類学、民族学、民俗学

6) 気象学(石器時代→現代、世界の地域毎の

気温、海水位)

7) 絹に関する漢字・意味を理解し日中古文書

を読む

多用される漢字の意味

「絹」という字は今日の日本では絹の全てを指していますが、古くは中国では勿論、日本でも絹の状態を表すために多くの字が使われていました。古事記、続日本記、風土記、延喜式、養老律令、令義解など読むに当たって随所に使われている絹を指している漢字の意味を解説してみましよう。

絹一般をさす字は「帛^{はく}」という字が使われています。その中でも少々質の劣るものを「糸曾^{そろう}」としています。「絹」は平織りの中程度の織物を指し、平織り以外の物は「綾^{あや}」、「錦」等々、織りの形状によって沢山の字が使われています。同じ平織りでも経緯糸が細く織り密度が高い（含、羽二重）高級品は「糸兼^{けん}」。平織りで糸の太い物を「糸施^せ」といい、より太くて固い物を「糸巨^{きょ}」、太く甘摺りの物は「紬^{ちゅう}」と書いています。綿は綿^{めん}（上質）、絮^{じょ}（低質）。

絹、シナ種の誕生

小氷河期が過ぎた1万年前頃には地球の温度が現在より5℃位上昇し、動植物が活発繁茂しました。狩猟で生活する石器時代、野外の昆虫は子供でも簡単に採取できる栄養豊富な大切な食料でした。桑の葉に付くクワコの繭は鋭利な石器でも切る開く事はなかなか難しく、繭ごと口に入れて噛むと口の中に残った糸が束なつて口から出て来ます。それが人と絹の出会いであったと思われるます。これを飼い馴らし、昆虫の家畜化に成功したのです。それが現在の中国の浙江省付近のクワコ（生殖細胞染色体28）からはじまったといわれています（日本クワコは同染色体27）。こうして年一回羽化する一化性の蚕「シナ種」が誕生したのです。気温上昇で栄養豊富な桑の葉も春から秋まで育ち、蚕が二化生に進化し、八千年前頃

には発祥地から亜熱帯まで南下した蚕は通年餌があるので、多化性（何回も羽化する）、三眠蚕（3回休眠）に進化し、北上した蚕は気温も低く餌の葉の育つ期間も短いので、一化性から二化生（4眠蚕）に留まりました。

日本への伝来

第1ルート…中国東南部と南下した蚕→丸みのある糸

弥生前期：中国南部→東シナ海→北九州（養蚕技術500年滞留）。一化性、二化成蚕

弥生中期：雲南→東シナ海→北九州→瀬戸内→畿内

ク→八丈島→東海地方。二化性、多化成蚕

この時は現在雲南地方に住む非漢族の苗族^{みんぞく}が中国南東部海岸線に居住しており、彼らが進化した二化生、多化性蚕種と染織技術を持って直接日本に渡って来たと思われるます。八丈島に今でも苗族由来のカタツペ織りが存在しています。彼らが織る錦織は弥生後期卑弥呼の時代の倭錦となり、魏の皇帝への献上品になったと思われるます。

第2ルート…中国東南部を北上した蚕：扁平で細めの糸
弥生中期：楽浪（北部朝鮮）→日本海沿岸（北陸）

北上ルートの蚕種と染織技術を持って長期間にわたり、幾度も大量移民。

本田カイロプラクティック先生の春夏秋冬

本田 勇氣

2019年7月31日

身体の微妙な変化

いきなりの熱帯夜

足がつる

小便の回数が少ない

めまいがする

吐き気

お腹の痛み

首肩腰の重さや痛み

など出ていないですか？

これらは脱水症状や

逆に睡眠時に身体が冷えたことにより

起きやすい症状です

起床後直ぐに

ミネラル分の多い水分(麦茶など)をコップ1杯

などを飲むようにしてください

身体の冷え⇨腸の冷え

です

エアコンなどで冷えた身体をリセットする為にも

暑くても必ず湯船につかりましょう

その時に

湯船につかりながら腹式&深呼吸をして

腸を物理的にも動かして行きましょう

夏風邪のスパイラルに

はまらない様に

身体を労わっていきましょう

2019年8月5日

朝方の怠さ予防

本田カイロにいらっしやる患者さんから

「夜 寝苦しくてエアコンをつけるのですが

そうすると朝起きた時に怠いんです

どうしたら良いでしょうか？」

という質問を受けました

確かにこの熱帯夜

エアコン無しでは寝れませんよね

以前からお勧めしているのが

自分が寝ている部屋(寝室)の

隣の部屋のエアコンを使う

そうすることで

直接冷風が当たらず室温だけ維持でき

身体の負担が減らせます

今回は

タイマーの使い方

起床時の1時間〜1時間30分までに

エアコンを止めておくというものです

そうすることにより

体温も安定し怠さが変わります

その1時間が暑くて

という方は扇風機を使いましょう

もちろん身体に風が直接当たらない様に

回していきましょう

そろそろ

暑さに身体が順応し始めるころです

暑いですが(笑)

少し楽になると思います

「江上浩二の独り言」 21

江 上 浩 二

リフォーム前の壁掛け作品

令和になって、5月の連休後に、築30年を向える我が家のリビングとキッチンスペースの大リフォーム工事が始まった。2月頃から業者と打ち合わせを開始し、これからは30歳をとうに過ぎた子供達が使うので、子供達の好み要望を沢山出してもらい、それに合わせて業者からの提案を受け、煮詰めて最終案となった。どちらかというと私の願望は抑えた。わざわざ大阪にいる二男は建築科出身ということもあって東京の打合わせに顔を出し、業者もメールで二男へ回答などもくれていた。二男は予算の金額には目もくれず、良いものや改造案をどんどん出していく性格だ。娘もキッチンのシステム化や対面式・オープン化でどしどし母親を押していく。長男夫婦は綺麗好きで、食洗機は勿論、配置でも物を出来るだけ置かないようにシンプル派だ。

個性と性格が出て当たり前、システムキッチンのショールーム見学へはお嫁さんや娘は勿論、二男は結構業者に食らいついたようだ。私も同行したが、皆が気に入る環境作りが出来れば善しとした。最後の詰めは家内と娘が行き、キッチンの色をもっと明るく白っぽくしてきて、少し予算額を下げた。

普通、新しく仕上がった壁紙の壁には写真の1枚や2枚、絵画の1枚や2枚位、別に骨董的価値に問わず、飾りたくなるものだが、今回のリフォームの約束は一切何も壁には掛けないと決めたのである。

実はリフォーム前はご多分にもれず、どこの家庭でも見られる光景のように子供が小さい頃から撮った写真を大きくしてフレームに入れ、壁につるしておいたのだ。枚数は定かでないが、娘が3才頃初めて料理をしてサラダを作った、東京に大雪が降り雪を掻き集め、まぐら〴〵をやつとのことで作り上げ、小さな子供が2人入る小さな穴が鎮座、子供の剣道、体操姿、京都の修学旅行、一番成長したもので次男の高校の入学式でなぜだ

か止まった。それらの中で白黒の作品2つだけ違っていた。1枚は私が学生時代（1975年）に北海道（道東）野付半島近くの尾岱沼で冬撮影した白鳥と、もう一つは30年前の新築祝いで家内の知り合いから頂いた銅版版画（エッチング）である。

私の冬の凍った湖と数羽の白鳥よりも、頂いたエッチングの主（学校の美術系の先生と伺っていたが作家と呼んでおこう）が気になった。私は一度もお会いしたことのない主（家内の知り合いの女性の旦那さん；年齢的に定年退職され、数年前都内よりご出身地の方へ戻られている）であるが、エッチング作品に残されているアルファベットの署名で調べると著名な方と分かった。x x x 展覧会の審査員を務めていらつしやる。人の顔をデフォルメした当時お祝いで頂いた作品（木霊Xと題されている）から進化転化され、写真と間違えそうな位、繊細で緻密な森の木々を描いた作品はインターネットで紹介されていた。ご出身の群馬の山奥か、私の記憶を辿ると上高地の沢沿いのまだ樹木が残って枝落ちし、それが朽ちかける経過のように凄い年数を思わせる作品だ。私には寂し

げだが長い長い静かな生命を感じた。

なぜ、30年前の当時このような作品を頂いた由縁を考えると、ご両親のお仕事の関係で子供さん達を朝早く保育園に連れて行くことが出来ず、家内が代わって知り合い（地元の学校の同級生同士）のお子さん達を連れて行ってあげていたのだ。当時は待機児童という言葉もなく、近所で協力していたのだ。家内も仕事をしていたが朝、時間の余裕は少しあったようだ。インターネットで、ご夫妻が昨年、〃木と水と土と〃と題して二人展を開催されていたこと知り、お子様たちも親の手から離れたのだろうと安堵した気持ちになった。まさに森の木とせせらぎの水、土とは奥様の陶芸家としての粘土だと私の独り言となった。

令和元年7月2日記す

漢詩研修 (三十五)

千代田岳精会 平井茂行

花^{はな}を惜^おしむ

福^{ふく}沢^{ざわ}諭^か吉^{きち}

半^{はん}生^{せい}の行^{こう}路^ろ苦^く辛^{しん}の身^み

幾^{いく}度^たか春^{はる}を迎^{むか}え還^{また}春^{はる}を送^{おく}る

節^{せつ}物^{ぶつ}は忽^{そつ}忽^{そつ}とて留^{とど}められも止^やまらず

花^{はな}を惜^おしむ人^{ひと}は是^これ霜^{しも}も戴^{いた}くの人^{ひと}

【作者】 福沢諭吉

【語釈】 半生Ⅱ人生五十の半分。行路Ⅱ行く路。人生の行路。迎春環早春Ⅱ春を迎えまた春を送り。年々年をとる。節物Ⅱ四季折々の景色。忽々Ⅱ慌ただしい様。花Ⅱ梅か桜のどちらかであろう。ここでは、単に春の花程度の意味。戴霜人Ⅱ霜を戴くで白髪。老人の事。

1859年（安政6年）【24歳】

横浜見物を契機に独学で英学を学び始める。

1860年（万延元年）【25歳】

咸臨丸で渡米、帰朝後幕府の外国方に雇われる。最初の単行書『増訂華英通語』を刊行。

1862年（文久2年）【27歳】

遣欧使節団に随行して、ヨーロッパ各国をまわる。（フランス、イギリス、オランダ、プロシア、ロシア、ポルトガルなど）

1864年（元治元年）【29歳】

中津に帰り、小幡篤次郎ら6人の中津藩子弟を伴い帰京。幕府翻訳方となる。

1866年（慶応2年）【31歳】

欧州諸国を廻り見聞したことをまとめた『西洋事情』初編を刊行。

1867年（慶応3年）【32歳】

幕府の軍艦受取委員随員として再渡米。

1868年（慶応4年）【33歳】

時の年号にちなんで塾名を「慶應義塾」と定める。

1899年（明治32年）【64歳】

『福翁自伝』『女大学評論・新女大学』刊行。

1900年（明治33年）【65歳】

門下の高弟数名に編纂させた「修身要領」を発表。

1901年（明治34年）【66歳】

1月25日脳溢血再発。2月3日東京三田の自邸で永眠。

『奥の細道 奥州へ 其三』

中屋保之

飯塚（今の飯坂温泉）で温泉に浸かりながらも、『あやしき貧家』で眠れぬ一夜を過ごした芭蕉一行は、その昔、鎌倉へ向かう義経主従も辿ったであろう国見峠を越え、奥州伊達藩の領地白石城下へと足を踏み入れた。

（笠島 元禄二年五月四日）

あふみ摺、白石の城を過、笠しまの郡に入れば、「藤中将実方の塚はいづくの程ならん」と、人にとへは、「これより遙右に見ゆる山際の里を、みのは、笠嶋と云、道祖神の社、かたみの薄、今に侍る」とをしめ。此比の五月雨に道いとあしく、身つかれ侍れば、よそなからなめやりて過るに、みのは、笠しまも五月雨の折にふれたりと、

笠嶋はいづこさ月のぬかり道

藤原実方（九九八）は、一条天皇時代の和歌の名手で、当代きつてのプレイボーイとして名を馳せていたといわれる。左近衛中将にまで昇進したが、御前歌会の席で、藤原行成と口論に及び陸奥守に左遷された。どうも、清少納言を間に挟んだ恋の鞘当てが原因との言い伝えがある。実方は、長徳四年十二月十二日、笠島道祖神前で馬の下敷きになって死亡。そのままこの地に埋葬されたらしい。なお、藤原行成は当代の能書家として三蹟（跡）とも）の一人に数えられ、権大納言であったので、権跡（ごんせき）と称された。小野道風は小野の「野」をとって野跡（やせき）、藤原佐理は佐理の「佐」をとって佐跡（させき）という。

後に西行法師がここを訪れ、実方の形見とて薄の穂波だけとなっている姿に涙して一首したためている。

朽ちもせぬその名ばかりをとどめおきて枯野の薄かたみにぞ見る

（仙台 元禄二年五月四日（八日））

名取川をわたつて仙台に入。あやめふく日也。旅宿をもとめて、四、五日逗留す。爰に画工加右衛門と云ものあり。聊心ある者と聞て、知る人になる。この者、年比さたかならぬ名とところを考置侍ればとて、一日案内す。宮城野の萩茂りあひて、秋の気色おもひやる。玉田・よこ野、つ、しかおかはあせび咲比也。日かけも、らぬ松の林に入て、爰を木の下と云とぞ。むか

しもかく露ふかけれはこそ、「みさふらひみかさ」とはよみたれ。薬師堂、天神の御社なとおかみて、其日はくれぬ。猶、松嶋、塩かまの所、画にかきて送る。且、紺の染緒つけたる草鞋二束はなむけす。されはこそ、風流のしれもの、爰に至りて

其実をあらはす。

あやめ草足に結ん草鞋の緒

芭蕉が仙台に入ったのは、アヤメで屋根を飾る端午の節句の候であった。

この時期、仙台俳壇の指導的立場であった大淀三千風は既に仙台を離れており、俳壇は実上崩壊していたようである。芭蕉は、こで、北野屋という俳諧書林を営んでいた『画工加右衛門と云もの』に出会い、彼の案内で専ら観光に勤しんだらしく、仙台城の大手門から伊達家の氏神である亀岡八万へまわり、仙台東照宮、国分尼寺の跡に建つという薬師堂、榴岡天満宮にも詣でた。薬師堂あたりは宮城野と呼ばれ、古歌にも読まれるほど、萩の生い茂った風流ある土地であったらしい。加右衛門の案内は丁寧で、仙台の名所を案内し尽くしたかの感があると、手放して喜んでいふふうである。更に、加右衛門が発ったあとにも思いをいたして、松島、塩釜への道筋や見どころを記した絵地図をプレゼントしてくれた、とある。先の句は、端午の節句の菖蒲にちなみ、紺染め鼻緒をつけた草鞋を二足饒別に差し出してくれた配慮に対する返礼の句とされる。私はお別れして旅の供をすることはできないが、菖蒲が邪気を払うと言われるように、二足の草鞋が（芭蕉と曾良の）お二人を災いから遠ざけ、旅路を安寧ならしめるように、との含意が芭蕉の胸にも響いたと思いたい。

その後二人は加右衛門の絵図を頼りに、「奥の細道」といわれる街道（仙台の北東）を通り、塩釜、松島へと歩みを進めた。松島で芭蕉が感激のあまり句を残さなかったことは良く知られている。仙台から松島までの七日間、「奥の細道」に記された芭蕉の句は、先の一句のみであったという。名所巡りに忙しかったと想像するのもまた一興であろう。

（多賀城 元禄二年五月八日）

彼画図にまかせてたどり行は、おくの細道の山際に十符の苔有。今も年々十符の菖菰を調て国守に献ずと云り。
壺碑 市川村多賀城に有。

つぼの石ふみは、高廿六尺余、横三尺計敷。苔を穿て文字幽也。四維国界之数里を印す。「此城、神亀元年、按察使鎮守符將軍大野朝臣東人之所里也。天平宝字六年、参議東海東山節度使、同將軍惠美朝臣朝かり修造而。十二月一日」と有。聖武皇帝の御時にあたれり。むかしよりよみ置る歌枕、多くかたり伝ふといへとも、山崩川流て道あらたまり、石は埋て土にくれ、木は老て若木にかはれは、時移り、代変して、其跡たしかならぬ事のみ。爰至りてうたかいなき千歳の記念、今眼前に古人の心を聞す。行脚の一徳、存命の悦、羈旅の勞をわすれて、泪も落るはかり也。

《参考文献 吉川弘文館 松尾芭蕉と奥の細道 佐藤勝明 岩波文庫 奥の細道上野洋三・櫻井武次郎 など》

「こだわり」

大橋 望彦

まるで物に憑かれたように凝りに凝る、と、謂う時がある。その時は、將に夢中の真つ只中に居るのであらう。とても不思議なのは、少しも辛い思いと言うのが無い。それどころか、後に爽快感すら感じるのだ。特に、研究所で仕事をしていた頃は、此の連続のような氣もする。

ところが、歳を取ってくると、このような凝り方が少なくなってきた。むしろ、同じ凝るにしても、時間を掛けて、余り夢中にはならず、むしろじっくりと執拗に拘るタイプに変わってくるように思う。それは、一種の使命感と言ったものが薄らいだのかもしれない。定年と言う区切りがその様にさせるのかもしれない。

このような変化は、歳には関係なく、行っている仕事自身の変化によるものであるとも言える。科学の世界では、日進月歩と言う厄介なものがあり、ちよつと油断をしていると、それまで折角展開してきた「仮説と論理」の積み重ねが、あつという間に他の研究者に覆えされてしまう事もある。学会での論争では偶にその様な事があつた。

一方で、芸術の世界では、其れには競争と言うもので

はないが、自分の持つ芸術観といったものをどの様に表現すれば正確に自分を描き出せるのかを模索している。其れには日進月歩も存在し、切磋琢磨も存在する。一つには、技術の向上も必要であらう。大切なのは自ずから持つ感性でもあらう。どんなに凝って見ても、中々此の感性は生まれてこない。それは技術の向上に関する凝り様に關係しているのかもしれない。しかし、どんなに技術が向上しても、それだけでは芸術性は評価されてこない。

技術の上では素晴らしい一木造りというのがある。この技術は例えかなり高度であつても、感性で観るデザイン上に欠陥を見出すと、芸術作品とは見做されなくなるといふ。小生の作品でも同様なことが言えるだらう。即ち、専ら鹿の木彫を造っているが、その中で、一木彫りの彫像がある。一本の太い枝を素材として、台座から足、胴、首、頭、角と言うように継ぎ目無しに彫り上げるのである。枝木であるので、木目は一方向であり、どんなに細くとも木目の方向を選べない。従がつて、部分によっては、木彫では禁忌といえる逆目の場所も出て来る。何もそんなに苦労してまで一木に拘らなくともと、考える事も偶に在る。こんな事を考えていたら、偶々観ていたテレビ番組（Ｅテレ・スウィッチ インタビュー）で同じ様な話をしているのが目に入ってきた。オダギリ・ジョー

(俳優、最近上映された映画「藤田嗣治」の主演)と、館鼻則孝(アーティスト、レディー・ガガのヒールレスの靴をデザインしたり、それをパリ・コレで世界中に広めて有名)の対談だったが、矢張り技術と感性のバランスが難しく、年齢と共に変化する事を熱く語っていた。ピカソの絵のように、子供が描いたような絵の技法は、実はその感性と技術がバランス良く出来ている。極めて優れた域までに技術も達しているからこそ、即ち、観ている者を三次元、四次元の世界に引きつり込む程の技術と感性をもってして初めて、芸術作品としての価値が認められるのである。因みに、彼の初期デッサンなどを観ればその優れた技術を見ることは、どんな素人にでも判り易い。安易にピカソのような技法を真似て描いたところで無味で面白くも無いものしか出来上がらない。やはりそれには、優れた感性が伴わねば成らない事もハッキリとしている。

その様なテレビの影響ではないが、フト、気が付いたのは『芸術は爆発だー!』で有名な岡本太郎氏のような感性も同じ様な事が云える。彼の爆発力は周知の如くであるが、それは彼独特の技術の為せる技とも言える。然し、彼自身は芸術が爆発していると言っている。否、彼は厳密に、芸術は、と断っている。即ち、爆発しているのは

感性で、その感性の爆発こそ芸術なのだ。感性の爆発と言う抽象的なものを如何に顕現して最大の表現力に置き換える事が出来るのか。是が芸術の技術なのである。

此処で判り易い芸術の技術を現した作品を観る事が出来る。それはルノアール (Pierre-August Reoir: 1841-1919)の女性像である。彼の透き通るような女性の肌の表現であるが、少年時代に陶器工場で働いたときの経験が生かされているとも言われ、透明の絵具を陶器のように点描で重ね、時に紫や青色で陰影を表現する手法は、独特といえる技法である。これは彼の凝りに凝った成果なのである。然し、是に近い技法が日本でも既に使われている。即ち、江戸時代中期に京都で活躍した絵師、伊藤若冲(1716-1800)の絵画である。中国の水墨画に学び、更に彼独特の裏彩色、筋目書き、樹目描き等を駆使した技法は追従を許さないものとされている。将に芸術は技法によって支えられているという事をはっきりと示している。

科学でも芸術でも『色々なものへの拘り』は、発想から完結まで十分に、それらの表現の中に見られるが、是は裏方としての重要な役割を果たしているものと言えよう。

萬葉秀歌の鑑賞

津之地直一

鴨山の磐根しまける吾をかも知らにと妹が待ちつつあるらむ

鴨山之 磐根之巻有 吾呼鴨 不知等妹之 待乍将有(②二二三、柿本人麿)

(口訳) 鴨山の岩根を枕にして今、自分は瀕死の床に横たわっているが、妻はそうした自分のことは知らないで、自分の帰りをひたすら待ちわびていることであろうかナア。

人麿が石見国に逢って死に臨んで自ら悲傷して詠んだ歌。鴨山については古來異説が多く、高角山(②一三三)と同じ所したり、島根県江津市神村説、同県浜田市旧城山の亀山説、同県邑智郡邑智町亀山説などがあり、私注などは大和の鴨山(葛城の連山の中)とも見られるとしている。邑智郡説は茂吉の「鴨山考」「鴨山考補註」に詳しく考証されているが、茂吉も始めは粕淵村の津目山かとし、後「鴨山後考」では同村大字湯抱にある鴨山であろうとした。先年私もこの湯抱の地を実地踏査したが、鴨山といわれる山は高さ三六〇米位のごく平凡な山である。とまれ、この一首、死に臨んで勇ましい気負い立った言辞を弄さず、落着いてただ遠い妻のことを思いやつて詠んでいて、ここに如何にも人間的な人麿の心がよく出て居り、そのすなおな真情の流露は吾々の心にも共鳴を起こすのである。「恋ひ恋ひし鴨山を長く仰ぎ見る秋の日暮れの霧立つ峡に」これは鴨山を実地に眺めたときの拙作である。

大君は神にしませば天雲の雷の上に廬^{いかづち}せるかも

皇者 神二四座者 天雲之 雷之上爾 廬為流鴨(③二三五、柿本人麿)

(口訳) 天皇は神でいらつしやるので、天雲に鳴る雷神の上に庵をしておいでになることだ。

持統天皇が大和の雷岳に行幸された時、人麿の献つた歌。雷岳は現在高市郡飛鳥村大字雷にある小高い丘陵がそれとされ、ここからは大和三山を含めた大和平野が一望のもとに眺めわたされる。集中に神岳とも雷山とも又神なび山とも呼ばれて詠まれている。

「天雲の雷の上に」とは雷の岳を天雲に鳴るまことの雷のように言いなしたもので、この句には、天皇の限らない御威徳を讃仰し奉る語氣が自ら籠っている、真淵もその新採百首解で「岳の名によりてただに天皇のはかりがたき御いきほひを申せりけるさまはただ此人のはじめてするわざなり」と評した。結句は旧訓「イホリスルカモ」略解「イホリセスカモ」「流」を「須」の誤字と見て)の訓もある。初二句は人麿以前に既次のような歌がある。「一赤駒の腹ばふ田^{みやこ}みを京師となしつ」(①四六二〇、大伴御行)「一水鳥のすだく水沼を都となしつ」(①四六二二)人麿にも他に「一雲隠る雷山に宮敷きいます」(③二三五の或本云の歌)「一真木の立つ荒山中に海をなすかも」(③二四二)があり、後と思われる作に「一天雲の五百^{はへ}重が下に隠り給ひぬ」(②二〇五、置始東人)がある。かく見て來るとこの「大君は神にしませば」の初二句は、天皇を現つ神と信じた当時の強い信仰心に裏付けられた表現で、今日吾々の感ずるより以上に生々しい実感を持った表現と見なければならぬ。

オヤツ

夏 目 勝 弘

いまでは「御八つ」といえば、午後のお食といふことになつてゐる。

自分の子供の頃は、四季を通して野に山に食を求めて、駆け巡り、食べれる物を探したことが懐かしく思い出される。

五月になると鉄道の傾りに「イタドリ」の赤みを帯びた新芽が伸びてくる。

紙袋に塩を入れ持つてゆき、薄皮を剥ぎ塩を付けてかじる、味などどうでもよい、食べられるものなら何でもよい。

○虎杖の太き古からの倒れゐるところを見れば赤き芽立てり
(土屋文明)

茗荷にも思い出がある。叔父の家は農家のため、終戦直後の食糧の無い時代、父に連れられ十数キロを歩いて、たびたび行き食にありついた。

その折り庭隅に茗荷が出ていた。大人たちは食べていたので、自分も食べようとしたら叔父が子供が食べるとバカになる。今は脳に刺激を与えると言はれている。今は一番に食べたい一つ。

○ほのかなる茗荷の花を^ま目守る時わがおもふ子ははるかなるかも
(斎藤茂吉)

「野苺」

梅雨のころになると、道沿ひの叢にピンク色に輝くツブツブの野苺の実が目につくようになる。掌に山盛にし、一粒一粒食べてゆくただ只管に。

○野苺の赤き実いくつ掌にのせて心清しく思ひけるかな
(島木赤彦)

「グミ」グミには、ナツグミ、アキグミ、ツルグミがある。よく食べたのは、ナツグミがほとんどであるが、グミを食べると、ハヤテになると威されたことを思い出す。

○行きつりの道のべにして茶菓の実はつかはつかに紅し紅極まらなむ
(斎藤茂吉)

○瑞々し茶菓は赤らみ裏白きその葉の風に揉み合へる見ゆ
(尾山篤二郎)

「本通」

アケビは甘く美味で、腹もちもよく食べ盛りの子供にとつては一番のオヤツであつた。

またアケビは蔓では椅子、カゴなどを作り、茎の木部を利尿剤、頭痛薬とする。

別名、あかびかずら、あけびづる、やまひめ、はだつかづら。○むらさきの通草の花の散る谷に山鳩のこゑ二つきこゆる
(宮柊二)

○寂しさに堪へて分け入る山かげに黒々と通草の花枝りにけり
(斎藤茂吉)

○月よみの光すずしくなりにけり通草の莢はいまだ青きに
(高田浪吉)

○さ庭べの棚のあけびの熟れたるをひそかにとりし友は笑ひて
(岡麓)

○「むべ」アケビと同じで、実の形が丸い
(岡麓)

○郁子の花咲ける軒端の棚ひくし暮はてなくにてらす三日月
(岡麓)

○葉がぐれに郁子はいくつかかりをれどつゆじも降ればもぐべくなりぬ
(岡麓)

「けんぼなし」
成熟した花穂の枝は赤味を帯び肉質に變じ、甘味を有し、食用となる。

小学校の校門を出て直ぐの坂道に、冬になれとケンボナシの、赤味を帯びた肉厚の枝が落ちてゐる。それがケンボナシであり、冬場で食べられる唯一の自然からの、オヤツであり、

学校が終り一番さきに行く場所であつた。

○枳椇さびしき枝の葉は落ちて骨ばかりなる冬の霜かも
(長塚節)

「氷魚」のことから (224) 岡本八千代

私の籠り部屋に入ろうとするに、窓すれすれにまで木槿の白い花が幾つも咲いている。令和になってからの初花だ。

部屋に入ると、机の上には、

「文学する心Ⅱ科学する心」と書いた私の文字。私は早くからそう思っていた。たまたま、中日新聞の夕刊（2019年7月13日）の「大波小波」に、「大学文学部の逆襲」という小題のなかで、「各大学の文系学部は内向せずに、文学フリマなど外に出て、意気軒昂な企画を立てるべきだ。非合理や非効率であっても、自ら恃むところあつて怠け者になる人材こそ生むべきだ。」などとあつた。……。

そこで、アインシュタインの「相対性理論」を思い出し、辞書で引いてみると、

① 対立すること。

② 物ごとが時、所の見方によって、ちがっており、絶対でないこと。

③ 比較できるものが他に存在するようす。
などと書かれていた。

また、或る時の三河アラギ短歌会の時に、御津磯夫先生が、歌の創作で、「一首の歌の中へ、美しい言葉が自分に浮かんだら、その言葉をくりこんでゆくといい」とおっしゃったことも思い出した。……やはり、それも、朝永振一郎博士

（ノーベル賞受賞）の「くりこみ理論」の言葉と気づきながら伺った。

また、最近お亡くなりになった、 دونالد・キーン博士も、『短歌は必ずなんらかの美の要素を含んでいなければならぬ』という主張が子規と弟子たちの作品の中心にあつた」とその著書（『日本文学の歴史』16のP98）にも書かれていた。

では、令和の時代に生活している私たちのいや、私の心こそ如何に？と問いはじめたのである。とりあえず、「こうであるべきだ」とか、「あああるべきだ」とか決めつけないでゆらぎ思いつつ広い心で暮らしたいと思うこの頃である。

子規の随筆「松蘿玉液」（P15）にあつたことばに、「吾頭脳中に縮めたる宇宙を頭脳の外に投げ出せば宇宙は再び無量際にまでひろがりぬ。さてや吾頭脳を取りて此の宇宙に置けばこれはまた頭脳の小ささよ。おもしろきものは相対なり煩惱なり、つまらぬものは絶対なり悟りなり。」と書かれていたことだ。また、出て見れば春の風吹く戸口かな〴〵子規句とも一句が添えられていた。そして、（P26）には、「世の人或は俳句（和歌等）に求むるに主観的のものを以てす。主観的のもの二種あり。一を感情的のもの、一を知識的のものとする。前者は文学に属すれども後者は文学に属せず。」と。子規は「否、感情的のもの悪しきに非ず。主客両観相雜わる者亦た佳ならざるに非ず。只、これがために全く客観的のものを文学以外として排除すべからず。」と言っている。

五月雨や垣根は白き草の花（子規 客観的俳句）

編集室だより【二〇一九年七月】

今泉 由利

○有栖川宮記念公園へ俳句の吟行。

調べたいことがあると、都立中央図書館に出掛ける。気持良く有意義に過ごさせていただくありがたい図書館と同じ敷地の麻布台地の変化に富んだ地形を登ったり降りたり、池があり橋があり、とても歴史を物語ってやまない有栖川宮記念公園。

頂度雨降りだった。背高い木々に、自然に雨やどり状態。この大都会のまん中で、私達以外の人影もなく、なんと言う贅沢。潜む虫達の気配まで感じられる吟行でした。

もっこくの花、ぶどうの青房、びんぼう葛の花。

○会計さんが来て下さり、一年の締め括り事務をする。日本に帰ってきて、何とかアルゼンチンと日本とのことをしたいと、小さな会社を造り、アルゼンチンの生活で大好きだったもの「ロサ・モスケータ」とは、南極近い地方の小さなバラの実のジャム。アンデス山脈の麓、アンデスの雪解け水で育てたぶどうのワイン。かつて40tもある恐竜が闊歩した、アルゼンチンの天災のない肥沃な大草原に咲く、アルファルファの花の蜂蜜。などなど。輸入したい品々に、両国の制限があり、思うにまかせなかつたり、残念が多かつたけれど、

私のコンテナー荷物が横浜港に着いたりするうれしさはなかった。日本の製品では、加計呂島の黒糖。今でも手放せない。こんなこと思い出しながら、続けられなかった自身の弱さを悔んだままにいる。

○訥訥と仏像彫刻、釈尊の「結跏趺坐」のところ。右足を左の腿の上に乗せ、左足を右の腿の上に乗せ、両膝とお尻の三点で上体を支え、安定させる。このことだけでも、その修行の容易ではないことを、ずっしり知る。

○王子神社と王子稲荷神社のある権現山の頂上あたりの編集室の建物を、まるごと洗濯する。ということが始まり家のまわりは、足場が組まれ、ネットが張られ、その小さい隙間を掻い潜って出入りの日が続いた。厚いカーテンとはいえ、私の机から1m程のところまで、水びたし、ごしごし洗い、ゴリゴリ掃除、いろいろな作業がなされ、びっくり魂消る。

○絹の来た道。アトリエ・トレビの勉強会にゆく。いつの世紀、どんな状況で：絹の考古学。石器時代に（現在の中国浙江省、浙江省付近）クワコの蛹の捕食から、口から糸が採れる事が発見された。この時代、動物の、昆虫の家畜化が進む。ここあたりより今泉雅勝氏の世界放浪の旅の話に及び。それはそれは興味深い。

漢字のはじまりから、生活習慣から：新しい角度から「絹の歴史」始まります。

野菜・まんだら (19) 山椒

Zanthoxylum piperifum



○原産地・日本、北海道から屋久島まで。朝鮮半島の南部にも分布、及び中国。

○ミカン科 サンショウ属。落葉低木。雌雄異株。花には雌雄があり、花山椒の雄株には、実がない。



○果実、9～10月頃、赤く熟し、裂開して、中の黒い種がでてくる。

○果皮、熟した実の皮の乾燥、粉末は香味料として、鰻の蒲焼に、七味唐辛子に、正月の薬用酒屠蘇などなど。



○若葉は、食材として“木の芽”の名称がある。焼き物、煮物、など料理の彩り。使う直前、手の中に載せ、軽く叩いて、細胞を潰すと香りがたつ。



○花山椒、4月～5月に開花した黄緑色をした花を漬けた、花山椒は、料理の彩り、佃煮、当座煮。炒った塩と同量の花椒の粉末をまぜて花椒塩。揚げ物などに添えると美味しい。

○健胃、鎮痛駆虫作用。



○ひと鉢の山椒を、ベランダで育てていたことがあった。一羽のアゲハチョウが近寄ってきたと・・・小さな山椒の葉に、卵をひとつ残していた。しばらくして気付くと葉が一枚もなくなって、サナギが一つ残っていた。母アゲハチョウは一つの卵が育つのに必要な葉っぱの数の計算をしていたのだと。丸ぼうずになった私の山椒鉢を残して子アゲハチョウはとびたていった。

今泉由利

「三河アララギ」について

◇三河アララギ発行所 〒一四・〇〇二二

東京都北区王子本町一・二六・六・A

TEL (〇三) 五九二四・二〇六五

◇URL <http://imaizumiyuri.jp/>

E-mail yurimaizumi@jcom.zaq.ne.jp

◇編集・発行 今泉由利・森岡陽子

◇三河アララギ誌は毎月発行します。

◇会員・今まで会員の方。希望される方。

◇会費制 廃止。

◇新しく購読を希望される方 一ヶ年五千円。

◇振替口座 〇〇八三〇・六・五六二二九

◇原稿送付先 〒一四・〇〇二二

東京都北区王子本町一・二六・六・A

今泉由利 宛

◇原稿は毎月末日までに郵送下さい。